

石田梅岩（石門心学）の都鄙問答 にみる経営理念について

手 島 勝 彦

目 次

- I. はじめに
- II. 石田梅岩の略歴と人物
- III. 石田梅岩の著述と『都鄙問答』について
- IV. 石門心学について
- V. 代表的著述『都鄙問答』にみる経営理念と
その現代的意味
- VI. おわりに

I. は じ め に

我国の江戸時代中期に京都で興った心学ないし石門心学は、その根本理念を修正されることなく明治維新後まで続き、さらに、戦後の一時期を除いて現在まで生き続けている実践哲学である。この石門心学の創始者である石田梅岩の代表的著述には『都鄙問答』と『齊家論』とがあるが、ここでは『都鄙問答』をとりあげ、その中に重要な要素として含まれている経営理念を原文に即して理解し、その現代的意味について考察したい。

II. 石田梅岩の略歴と人物（石門心学の創始者）

(1) 略歴⁽¹⁾

- ①1685年（貞享2年）9月15日：丹波国南桑田郡東懸村^{とうげ}の中農石田権右衛門（浄心）の次男として出生。名を興長^{おきなが}、通称を勘平といい、のちに梅岩と号した。母・たね、兄・平兵衛。父は正直で厳格、母は慈愛深い人だったという。
- ②1695年（元禄8年）（11才）：京都の小さな商家に奉公する（5～6年間）。いつとはなく貧乏な商家となり、劣悪な条件での奉公に不平一つ言わず心をつくして勤める。
- ③1699年（元禄12年）（15才）：上記の京都の商家を辞し、また、兄が他家へ養子に出たので、実家に戻り農事に就く。このころ神道に帰依する。
- ④1707年（宝永4年）（23才）：兄が実家に戻ったので、京都の中規模の商家（呉服商・黒柳家）へ再び奉公に出る（約20年間）。奉公のかたわら、神道を信仰し、また、主家の人望ある老母の理解を得る。
- ⑤1719年（享保4年）（35才）：儒教教典や仏典を熱心に読書する。
- ⑥1727年（享保12年）（43才）：奉公しながら、京都の諸家の講義を聞いて熱心に学ぶ。しかし、なかなか得心せず、上記の主家への奉公（番頭）を辞し、小栗了雲（禅僧）に性理の学を学び、大悟する。
- ⑦1729年（享保14年）（45才）：京都車屋町通御池上ル東側に住居を定め、初めて講席（私塾）を開き、広く世人に講話する。初め聴講者は少なかったが、梅岩の熱心な努力に、主として商人の熱心な門弟が多くなる。
- ⑧1735年（享保20年）（51才）：自宅他6ヵ所に講席が設けられ、特に自宅では毎朝と隔夜に講釈する。
- ⑨1737年（元文2年）（53才）：住居が狭くなり、境町通蛸薬師上ル町に移る。

- ⑩1739年（元文4年）（55才）：『都鄙問答』（4巻）を公にする。
- ⑪1744年（延享元年）9月（60才）：『齊家論』（2巻）を公にする。
- ⑫1744年（延享元年）9月24日：60才にて死去。生涯独身。

(2) 人物

- ①梅岩の性格は誠実・律儀で、求道心が強く、境遇上の困難を克服する強い意思の持ち主であった（厳格な父のしつけ、11才から15才までの貧乏な商家への奉公、15才から23才までの多感な青年時代の農業従事など⁽²⁾）。
- ②子供の頃から理屈っぽく、意地が悪いことが短所であったが、しかし、自己反省の強い人でもあった。

『我レ幼年ノ時分ヨリ、生レツイテ理屈者ニテ友達ニモキラハレ、唯イデノ悪イコト多ク、14・15歳ノ頃フト心付有テ、之ヲ哀シク思フヨリ、30歳ノコロハ有増ニナフリタリト思ヘドモ、言葉ノ端ニ見侍シガ、是レモ40年ノコロハ、梅ノ黒腕キデ少シ酸メガ有ルヤウニ覺エ侍ベリ。今ニ至テハイデノ悪イコトハ有増無キヤウニ思ヘリ。』⁽³⁾

- ③梅岩の学問・修行の目的は、この世を悔いなく、悩みなく生きるためであり、学問・修行の後にはもう一度この世の中に戻って、世間とともに楽しむ暮らしをするのがねらいであった。

『日々に心やすらかな生活を営みながら、それがそのまま社会の福祉、世の中の平和に役立つような道を求めて、思索を深めた一生でありました。そうしてその境地に達するために、神道の書を学び、儒教、仏教の經典を学び、ついには書物をこえ、文字をこえて、神の心、聖人や仏の心になり切るまでに修行に精進いたしました。精進して、しぬいた結果、その域に達しましても、悟ったことだけで満足のできる梅岩ではありません。そうした心境を力にし、尺度にして、毎日毎日の生活を正しくして、おのずから社会の福祉、世の中の平和を持ちきたすような境涯に達するのが、学問したり修行したりした、そもそもの念願でありました。』⁽⁴⁾

Ⅲ. 石田梅岩の著述と『都鄙問答』について

(1) 主な著述⁽³⁾

- ①『都鄙問答』4巻, 1739年(梅岩55才)刊。

梅岩が自己の学問上の立場とその根本原理を明らかにし, 士・農・工・商・儒・医等のそれぞれのその道を述べた, 石門心学の根本經典。

- ②『齊家論』2巻, 1744年(梅岩60才)刊。

梅岩の思想の核心である“各人の性”を知るための具体的で手っ取り早い方法として, また, 知った後に実行すべき具体的な実践の徳目として, “儉約”を第一にあげ, これについて詳述したもの。

- ③『石田先生語録』及び『石田先生語録補遺』

梅岩と門弟との月次の会での問答をまとめた書。

石田先生語録のうちには, 『女教訓』が独立したものもある。

- ④『先生問答并門人物語』

梅岩に近侍した門弟が師の話しを書き残したもの。

- ⑤『莫妄想』

石門心学の根本原理である“各人の性”が無である所以を問答を通じて弁証したもの。

- ⑥『文藻・遺墨雑篇』

梅岩の没後, 弟子たちによって集められた, 師の手になる和歌や文章, 日用の書簡・筆蹟など。

- ⑦『書簡集』

梅岩の書簡約200通を集めたもの。

※上記のうち, 石田梅岩の代表的な著述は, 『都鄙問答』と『齊家論』である。なお, この“学”には当初名称はなく, のち, 「石田学」又は「性学」とよばれたが, 門人手島堵庵の時代から「心学」の名称で呼ばれるようになった。⁽⁶⁾

(2) 『都鄙問答』について

① 『都鄙問答』の編集

『都鄙問答』は、石田梅岩の主著であり、石門心学の根本的な經典である。それは、月3度の月例会での門人との問答の筆記を取捨選択・改訂推敲して成った4巻4冊の私家本であったが、のちにはめざましい普及をした。⁽⁷⁾

② 『都鄙問答』の構成

『都鄙問答』とは、都会の人と田舎の人との間にとりかわされた問答という意味で、4巻4冊・16段の問答から構成されている。その内容は、次の通りである。⁽⁸⁾

巻之一

都鄙問答ノ段

孝ノ道ヲ問ノ段

武士ノ道ヲ問ノ段

商人ノ道ヲ問ノ段

播州ノ人学問ノ事ヲ問ノ段

巻之二

鬼神ヲ遠ト云事ヲ問ノ段

禅僧俗家ノ殺生ヲ譏ノ段

或人親へ仕ノ事ヲ問ノ段

或学者商人ノ学問ヲ譏ノ段

巻之三

性理問答ノ段

巻之四

学者行状心得難キヲ問ノ段

浄土宗ノ僧念仏勸ノ段

或人神詣ヲ問ノ段

醫ノ志ヲ問ノ段

或人主人行状ノ是非ヲ問ノ段

或人天地開闢ノ説ヲ譏ノ段

③『都鄙問答』の諸本⁽⁹⁾

基本的な版式からみて、初版、再版、三版の3類に合計10種の諸本がある。

{	初版本：第1種本 ⁽¹⁰⁾ から第4種本まで4種
	再版本：再版第1種本と再版第2種本の2種
	三版本：第三版第1種本から第三版第4種本まで4種

Ⅳ. 石門心学について

- (1) 石田梅岩のあと、近江屋仁介（斉藤全門）、近江屋嘉左衛門（手島堵庵）、大喜屋平兵衛（木村重光）、十一屋傳兵衛（富岡以直）などの武士・町人30余名が、その流れを次ぎ、半世紀を経て急速に進展し全国60カ国に普及した。ちなみに、諸侯65藩95名が心学を修め、藩士修養・領民教化のために採用したもの71藩に及び、心学講舎は182を数えた。なお、その根本理念は修正されることなく明治維新後まで続いた。⁽¹¹⁾
- (2) 石門心学の特徴は、生活の体験を学問の根拠として、そして、行為を通じた実践に終わる生きた学問であることである。それは体験からじかに学び、自らかえりみて「心を知る」ことを学問の初めとし、そして、知ったことを実践してこそ学問は生きるとしたことである。いわゆる石門心学は、生の哲学であるとともに行の哲学であって、信を説く教えではない。⁽¹²⁾
- (3) 石門心学の性格は、町人のために町人の手によって、町人の体験から、町人の道を説いた実践哲学であることである。いわゆる、それは、町人の哲学であり、庶民の哲学であることである。⁽¹³⁾
- (4) 石田梅岩の哲学思想
 - ①天人一体の世界観

天地万物が自分と一体であるというもの。すなわち、わが心は天地の心であり、わが理は万物の理であるとするが、しかし、万物と人とはその源を同じくするとはいえず、万物は万物自体がその同じことを自覚できない。人のみがよくこれを自覚して、おのれの心をもって、天地の心、万物の理を推すことができるというもの。⁽¹⁴⁾

②性理の形而上学

性、理、心、天、命などの概念が石田梅岩の哲学思想の中心である。すなわち、天地の間で、万物にあまねく内在する普遍的な実体を“理”と呼び、特に人間にあり、人体に宿ったものを“性”とよんでいる。そして、心を尽し性を知り、性を知って、天を知るところに学問の至極があるとするもの。⁽¹⁵⁾

③心性の問題

学問は“性”を知ることには始まるが、その第一歩は“心を知る”ことにあり、そして、“心を得る”ことが学問の終わりであるというもの。すなわち、“心を得る”ということは、心の本体を明らかにして、性を養うことであるとするもの。また、心は思考の主体であり、行為の源泉であるとし、心と性の関係、心のあり方、心の本質を課題とするもの。

なお、のちに『心学』の名称が得られるのはこの哲学思想による。⁽¹⁶⁾

④人倫の大道の実践哲学

石田梅岩の哲学思想の最終目標は、人倫の大道ないし聖賢の道である。つまり、梅岩は学問の第一を、何よりも“聖賢に至ること”にあるとしている。それは、孔子の仁、また、孟子が聖人の徳とした仁に至ることであり、仁の実践そのものによるのである。⁽¹⁷⁾

- (5) 石門心学は、人間生活の意味を探究した人生哲学であると同時に、その道とする所を広く一般に及ぼそうとした社会教化の運動である。梅岩は、講話と著述によって、つとめて平易な言葉をもって一つ一つ事例をあげ、また、巧みにたとえ話を引いて、主として町人社会の教化につと

めた。その講話や著述の中に商人の経営理念といわれるものが重要な要素として含まれている。それは江戸時代中期及び後期を代表する我国独自の経営理念である⁽¹⁸⁾。

V. 代表的著述『都鄙問答』にみる経営理念とその現代的意味

(1) 代表的著述『都鄙問答』にみる経営理念

①商人の道について（巻之一 商人ノ道ヲ問ノ段一全文一）

——商人は誠実・親切な心で買手の心を尊重し、商品に念を入れ、万事に粗略にせず売り渡すことを方針として経営すべきであり、それが商人のあり方（商人の道）である。資本を蓄積することも、そのような商人の道によるならば是認されるべきであると主張するもの（商人としての人間のあり方を哲学的に学として求めたもの）。

『答。商人ノ其始ヲ云バ、^{イニシヘ}古ハ其餘リアルモノヲ以テソノ^{タラザル}不足モノニ易テ、互ニ通用スルヲ以テ本トスルトカヤ。商人ハ勘定委シクシテ、今日ノ渡世ヲ致ス者ナレバ、1錢^{カサネ}輕シト云ベキニ非ズ。是ヲ重テ富ヲナスハ商人ノ道ナリ。富ノ主ハ天下ノ人々ナリ。主ノ心モ我カ心ト同キユヘニ、我1錢ヲ惜ム心ヲ推テ、賣物ニ念ヲ入レ、少シモ^{ツツ}僞相ニセズシテ賣渡サバ、買人ノ心モ初^{ハジメ}ハ金銀惜シト思ヘドモ、代物能ヲ以テ、ソノ惜ム心^{ツツ}自ラ止ムベシ。惜ム心ヲ止善ニ化スルノ外アランヤ。且天下ノ財寶ヲ通用シテ、萬民ノ心ヲヤスムルナレバ、「天地日時流行シ、萬物育ハルル」ト同ク相合シ。此^{カクノゴトク}如シテ富山ノ如クニ至ルトモ、欲心トハイフベカラズ。欲心ナクシテ1錢ノ^{ツツ}費ヲ惜ミ、青戸左衛門ガ五拾錢ヲ散シテ十錢ヲ天下ノ為ニ惜マレシ心ヲ味フベシ。此如ナラバ天下ノ公ノ^{ツツ}儉約ニモカナヒ天命ニ合ウテ福ヲ得ベシ。福ヲ得テ萬民ノ心ヲ安ズルナレバ、天下ノ百^{オホシタカラ}姓トイフモノニテ、常ニ天下太平ヲ祈ルニ同ジ。

且御法ヲ守リ、我身ヲ敬ムベシ。商人トイフトモ聖人ノ道ヲ不知バ、同金銀ヲ設ケナガラ不義ノ金銀ヲ設ケ、子孫ノ絶ユル理ニ至ルベシ。實ニ子孫ヲ愛セバ、道ヲ學テ榮ルコトヲ致スベシ。』

②売利（利益）をとることの正当性（巻之二 或学者商人ノ学問ヲ譏ノ段）

——いつわることや貪ることは正しい商人道に反するが、売利（利益）全般を否認するのではなく、商人の売利は武士の禄と同じとして、正しい売利（利益）を得ることは当然であると是認する。しかも、商人は売利をとることで成り立ち、そもそも売利をとることは商人の正直であって、商人の道であるというもの。

『答。賣利ヲ得ルハ商人ノ道ナリ。元銀ニ賣ルヲ道トイフコトヲ聞ズ。賣利ヲ欲ト云テ道ニアラズトイハバ、先孔子ノ子貢ヲ何トテ御弟子ニハナサレ候ヤ。子貢ハ孔子ノ道ヲ以テ、賣買ノ上ニ用ヒラレタリ。子貢モ賣買ノ利無クハ富ルコト有ルベカラズ。商人ノ買利ハ士ノ禄ニ同ジ。買利ナクハ士ノ禄無シテ事ガ如シ。』

『答。凡テ鬻貨日商。然レバ貨ヲ賣中ニ禄アルコトヲ知ルベシ。コノユヘニ商人ハ、左ノ物ヲ右ヘ取り渡シテモ、直ニ利ヲ取ルナリ。曲テ取ルニアラズ。口入バカリスル商人ヲ問屋ト云。問屋ノ口錢ヲ取ルハ、書付ヲ出シ置バ人皆コレヲ見ル。鏡ニ物ヲ移スガ如シ。隠ス處ニアラズ。直ニ利ヲ取證ナリ。商人ハ直ニ利ヲ取ルニ由テ立ツ。直ニ利ヲ取ハ商人ノ正直ナリ。利ヲ取ラザルハ商人ノ道ニアラズ。』

③商人の道の根本義（正しい商人道）（巻之二 或学者商人ノ学問ヲ譏ノ段）

——商人の道の根本義（正しい商人道）は“正直”であることとし、商人は正直でなければ立ちゆかないと説く。そして、商人はいつもわりを以って利益を得るもので、正直では商人は立ちゆくものではないと考える者は多いが、それは誤解であると主張するもの。

『答。世俗ノ言ニ加様ナル聞誤リ(商人ト屏風トハ直ニテハ不立)多シ。先屏風ハ少シニテモユガミアレバ畳レズ。此故ニ地面平カナラザレバタタズ。商人モソノ如ク、自然ノ正直ナクシテハ、人ト竝ビ立テ通用ナリ難シ。コレヲ屏風ノスグニタトヘタルモノナリ。屏風ト商人トハ直ナレバ立ツ。曲メバタタスト云ウコトヲ、取り違ヘテ云リ。古ヘノ伯夷ノ直モ屏風ノ直ニ勝ルコトアルベカラズ。』

④商人の心得(卷之二 或学者商人ノ学問ヲ譏ノ段)

——商人は、武士が自分に禄を与えて我身を養ってくれる主君に忠義を尽くすように、自分に売利(利益)を与えて我身を養ってくれる買手(売先)に忠実・親切・正直な商売をすべきである。すなわち、商人は、不当(不義)の利を取って売ることをやめ、そのために不当の利を取るような動機となる奢侈を一切やめ、私生活をつとめて質素にし儉約し、なるべく売利(利益)を少なくするようにして、万事買手に忠実・親切・正直にするときは、商売繁昌も疑いなく、これこそ正しい商人の心得だと主張するもの。

『答。最前ニ云ル如クニ、「一事ニ因テ萬事ヲ知ル」ヲ第一トス。一ヲ擧テ云ハバ、武士タル者、君ノ為ニ命ヲ惜マバ士トハ云ハレマジ。商人モ是ヲ知ラバ、我道ハ明カナリ。我身ヲ養ルルウリ先ヲ、疎末ニセズシテ眞実ニスレバ、十ガ八ツハ賣先ノ心ニ合者ナリ。賣先ノ心ニ合ヤウニ商賣ニ情ヲ入勤ナバ、渡世ニ何ゾ案ズルコトノ有ベキ。且第一ニ儉約ヲ守リ、是マデ一貫目ノ入用ヲ七百目ニテ賄是迄一貫目有リシ利ヲ九百目アルヤウニスベシ。賣高拾貫目ノ内ニテ利銀百目減少シ、九百目取ント思ヘバ、賣物が高直ナリト尤ラルル氣遣ナシ。無ユヘニ心易シ。且前ニ云尺違ノ二重ノ利ヲ取ラズ、染物屋ノ染違ニ無理セズ、倒タル人トウナヅキ合テ禮銀ヲ受ケ、負方中間ノ取口ヲ盜マズ、算用極メノ外ニ無理ヲセズ、奢リヲ止メ、道具好ヲセズ、遊興ヲ止メ、普請好ヲセズ。斯ノゴ

トキ類^{タグヒコトゴト} 盡ク慎^{ツツンシヤム} 止ル時ハ、一貫目設ル所^{マウク}ヘ九百目ノ利ヲ得テモ、家ハ心^{ヤス}易ク持ルル者也。扱利ヲ百目少ク^{スクナ}トレバ、賣買^{ウヘ}ノ上ニ不義^{フギ}ハ有増ナキ者ナリ。譬ヘバ一升ノ水ニ油一滴入ル時ハ、其一升ノ水一面ニ油ノ如クニ見ユ。此ヲ以此水用ニタタズ。賣買ノ利^{カクノ}モ如^{ゴトシ}是。百目ノ不義ノ金ガ、九百目ノ金ヲ皆不義ノ金ニスルナリ。百目ノ不義ノ金ヲ設ケ増^{マウ}、九百目ノ金ヲ不義ノ金トナスハ、油一^{ンゾク}滴ニヨリテ一升ノ水ヲ捨ル如クニ、子孫ノ^{ホロ}凶^{ユク}往コトヲ知ラザル者多シ。(中略) 商人モ二重ノ利、密々ノ金ヲ取ルハ、先祖ヘノ不孝不忠ナリトシリ、心ハ士ニモ劣^{サブラヒ}ルマジト思フベシ。商人ノ道ト云トモ、何ゾ土農工ノ道ニ替ルコト有ランヤ。孟子モ、「道ハ一ナリ」トノ玉フ。士農工^{コウシヤウ} 商トモニ天ノ一物⁽³⁶⁾ナリ。天ニニツノ道有ランヤ。⁽³⁷⁾』

(2) 『都鄙問答』にみる経営理念の現代的意味

石田梅岩の代表的著述である『都鄙問答』にみる経営理念は、江戸時代中期における商人の経営理念であるが、次の諸点の主張において現代的意味をもつものである。

①商人の機能は社会にとって有用・有益としたこと。

——商業の社会的有用性——

②商人は、売利（利益）をとることで成立し、そもそも売利をとることは商人の正直であって、商人が売利を得ることは当然であるとしたこと。

——利益の正当性——

③商人は、誠実に買手（市場）の心を尊重し、商品に念を入れ、万事に粗略にせず売買することが大切であるとしたこと。

——市場の重要視——

④また、先も立ち、我も立つ（自他ともに利益がある）ことを思うのが真の商人であるとしたこと。

——当事者双方の利益の考慮——

⑤正しい商人の道は正直であることとし、商人は正直でなければ立ちゆかないとしたこと。

——商人の道徳性——

⑥商人は、不当な利益を取って売ることをやめ、そのために不当な利益をとるような動機となる奢侈をやめ、私生活をつとめて質素にして儉約し、なるべく売利（利益）を少なくするように心得るべきであるとしたこと。

——経費（コスト）節減による価格の低下（経済的合理主義）——

Ⅵ. お わ り に

石田梅岩の代表的著述『都鄙問答』における経営理念は、江戸時代中期における商人の経営理念であるが、それは石門心学をバックにした経営理念であって、最終的には行為につながる実践的で生きた経営理念である。商人の正直さ・適正な売利（利益）・質素儉約（経費節減）・商人の社会的有用性などは言い古されたことではあるが、その実践性からみれば現代に十分通用する経営理念である。むしろ、現代の経営においてこそ“実践”してほしい経営理念といえる。そして、何よりも、この『都鄙問答』にみる経営理念が書物として残るものとしてはかなり古い我国独自の経営理念であることを強調しておきたい。

（この論文は、経営哲学学会第13回全国大会・自由論題口頭発表の原稿を元にして、かなり大幅に書き改めたものである。）

〔注〕

- (1) 石門心学の経済思想・増補版、竹中靖一著、ミネルヴァ書房、p. 401-427。
日本経営理念史、土屋喬雄著、日本経済新聞社、p. 202-208。
石田梅岩と『都鄙問答』（岩波新書）、石川謙著、p. 1-8の三冊から作成。
- (2) 石門心学の経済思想・増補版、竹中靖一著、ミネルヴァ書房、p. 403-404。
- (3) 石田先生語録——石門心学、日本思想大系42、柴田実著、岩波書店、p. 35。

- (4) 石田梅岩と『都鄙問答』（岩波新書），石川謙著，p. 9。
- (5) 日本経営理念史，土屋喬雄著，日本経済新聞社，p. 208-210。
- (6) 雲泉荘山誌，巻の三，石門心学関係図書及資料，杉浦三郎兵衛編，雲泉荘杉浦丘園発行，p. 8。
- (7) 近世思想家文集，日本古典文学大系97，家永三郎他編，岩波書店，p. 358。
- (8) 近世思想家文集，同掲書，p. 371-372。
- (9) 近世思想家文集，同掲書，p. 363-365。
- (10) 第1種本は元文4年刊（底本）。1739年，梅岩55才のときの初版本。
- (11) 石門心学史の研究，石川謙著，岩波書店，p. 23。
- (12) 石門心学の経済思想・増補版，前掲書，p. 71 および p. 81。
- (13) 石門心学の経済思想・増補版，同掲書，p. 63。
- (14) 石門心学の経済思想・増補版，同掲書，p. 144。
- (15) 石門心学の経済思想・増補版，同掲書，p. 153-155。
- (16) 石門心学の経済思想・増補版，同掲書，p. 164-165 及び p. 170。
- (17) 石門心学の経済思想・増補版，同掲書，p. 178。
- (18) 日本経営理念史，前掲書，p. 208。
- (19) 鎌倉中期の北条時頼に仕えた幕臣・青砥藤綱が，鎌倉の滑川（なめりがわ）で銭10文を落したとき，人足に50文出して，これをさがし拾わせた故事をさす。
- (20) 近世思想家文集，前掲書，p. 391。
- (21) 元金のこと。当時，大阪では主に銀が用いられた。
- (22) 春秋時代，衛の人。口才があり，貨殖に長じ，家に千金を重ねたという。魯・衛の相（大臣）となった。
- (23) 利益のこと。
- (24) 近世思想家文集，前掲書，p. 423。
- (25) 鬻は売と同じ意で，貨は物資のこと。
- (26) 当時は，手数料を書いて問屋の店に貼ってあった。
- (27) 写と同義。
- (28) 近世思想家文集，前掲書，p. 425。
- (29) 武王が殷を討つのを諫めて用いられず，周の粟を食うのを恥じて首陽山にかくれ，ワラビを食い餓死したという。潔癖正直な人の典型。
- (30) 近世思想家文集，前掲書，p. 425。
- (31) 1000匁のこと。
- (32) 利益のこと。元金の約一割が普通であった。
- (33) 反物の尺の短いもの。
- (34) 債権者のこと。
- (35) 契約通りの計算のこと。

- (36) 天が造った万物の一つの意。
(37) 近世思想家文集，前掲書，p. 432-434。

参考文献

1. 石門心学（日本思想大系42），柴田実著，岩波書店
2. 石田梅岩（人物叢書94），柴田実著，吉川弘文館
3. 心学（日本歴史新書），柴田実著，至文堂
4. 石田梅岩と『都鄙問答』（岩波新書683），石川謙著，岩波書店
5. 石門心学史の研究，石川謙著，岩波書店
6. 心学—江戸の庶民哲学（日経新書7），石川謙著，日本経済新聞社
7. 石門心学の経済思想（増補版），竹中靖一著，ミネルヴァ書房
8. 日本経営理念史，土屋喬雄著，日本経済新聞社
9. 続日本経営理念史，土屋喬雄著，日本経済新聞社
10. 近世思想家文集（日本古典文学大系97），家永三郎他校注，岩波書店
11. 雲泉荘山誌（巻の三），杉浦三郎兵衛著，からふね屋印刷所
12. 新版社是社訓，社会経済生産性本部，生産性出版